

# CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

## 虚弱高齢者について

在宅医療・自立支援開発部 在宅医療研究室

佐竹 昭介室長

平成 23 年 2 月 10 日(木) 16 時 00 分～

研究所 2 階会議室

高齢者の医療や看護・介護は、死という生物が生まれながらに内含する不可避的な問題を視野に入れつつも、自立を援助し支援するものである。長寿医療研究センターの理念は、「高齢者の心と体の自立を促進し、健康長寿社会の構築に貢献する」ことであり、在宅医療研究室はこの理念に基づいて、さまざまな加齢に伴う疾患の予防や治療により、住みなれた環境での療養を支援することを目的として調査・研究を進めている。

高齢者が住みなれた環境で生活をするための自立を支援するには、身体機能の低下につながる危険性を評価し、有効な介入方法を施す必要がある。しかしながら、身体機能の低下をどのような指標で捉え、どの程度になったら介入を行うべきなのか、またどの程度の状態で治療の選択に考慮されるべきか、これらの疑問に一定の見解は未だない。

近年、健康状態の崩れやすい高齢者（虚弱高齢者）の評価方法が議論されている。米国では虚弱症候群（Frailty Syndrome）という概念が提案され、この評価に基づいた調査の報告が行われている。当センター高齢者総合診療科の通院患者を主体に、現在、虚弱症候群の評価とその医学的特徴について調査を行っている。調査はまだ開始され始めたばかりであるが、先行研究の結果を交えて「虚弱」について調査の現状を報告する。